



# Geschichte

歴史

## 交流の始まりと国交樹立

江戸時代まで(～1868)

鎖国が厳しかった江戸時代にも、国交のあったオランダを通じて、日本を訪れたドイツ人がいました。徳川綱吉にも謁見した博物学者エンゲルベルト・ケンペルの見聞記『日本誌』(1727)は、欧州での日本のイメージに影響を与えました。19世紀前半にはオランダ商館医だったフランツ・フォン・シーボルトが、日本の西洋医学の進歩に貢献した一方で、日本の風土や動植物を広範囲に研究しました。

幕府が開国政策に転ずると、1860年にオイレンブルク伯爵率いるプロイセン使節団が、日本を訪問。翌1861年1月24日に日・プロイセン修好通商条約が締結され、日本とドイツの150年におよぶ国交が始まったのです。



オイレンブルク伯爵

## 近代国家・日本の模範として

明治時代(1868～1912)

1871年、プロイセンを中心としてドイツの統一が実現しました。明治維新から間もない日本にとって、ドイツは「近代国家」として歩み出したという共通点があり、法制、軍事、科学・芸術など様々な分野で模範となる国でした。

欧米に派遣された岩倉使節団が1873年、ドイツ帝国宰相ビスマルクに謁見したのに続き、1882年には伊藤博文らが憲法学者グナイストらの講義を受け、大日本帝国憲法の起草にあたってプロイセン憲法をお手本としました。現在に至るまで、日本の民法や刑事法などの法律は、ドイツの法制の影響が残っています。

近代化を目指す日本には、多くのドイツ人研究者が招かれ、法学・医学などの分野で教鞭をとりました。「ナウマンゾウ」で知られる地質学者ハインリッヒ・エドムント・ナウマンや、『君が代』に伴奏を付けた作曲家フランツ・エッケルトが「お雇い外国人」として知られています。日本在住のドイツ人により、1873年には東京に「ドイツ東洋文化研究協会」が設立されました。軍の士官候補生や医学生など、ドイツに留学する日本人も多くいました。陸軍軍医として留学した森鷗外が、ドイツでの体験をもとに小説『舞姫』を執筆したことは有名です。北里柴三郎はベルリン滞在中に、世界で初めて血清療法を開発して、第1回ノーベル賞の候補となりました。また、ライプチヒの市立音楽院で学んだ作曲家の滝廉太郎は、日本初のピアノ留学生です。

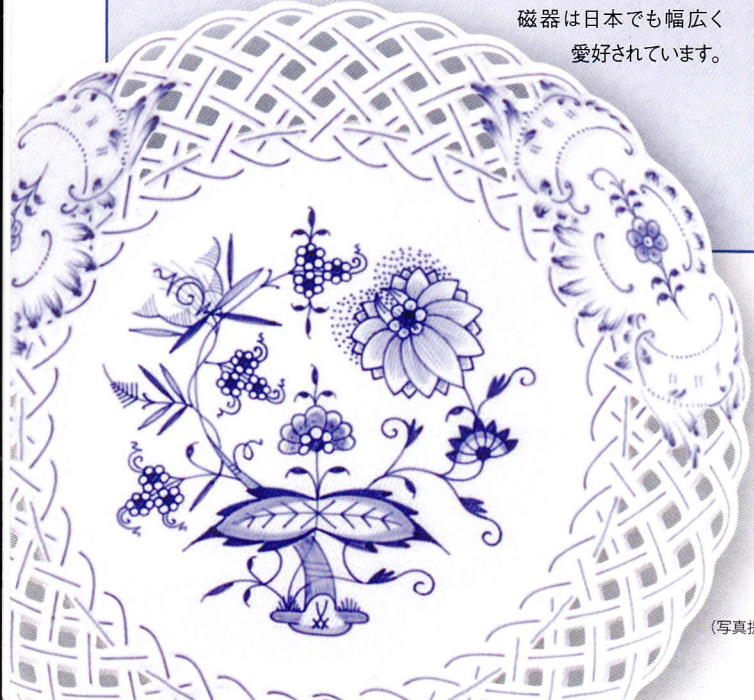


森鷗外

### 独逸話 ①

#### 日本をお手本にしたマイセンの磁器

昔からヨーロッパでは、遠く日本や中国からもたらされる磁器は「白い金」と呼ばれ、王侯貴族の富と権力の象徴でもありました。自国で美しい磁器を作れないものかと、ザクセン公国の王に命じられた錬金術師ヨハン・フリードリッヒ・ベトガーが、18世紀初めに欧州で初めて白磁の磁器の製法を解明したとされています。有田焼の影響を受けた初期の絵柄から、ヨーロッパらしいデザインまで、マイセン磁器は日本でも幅広く愛好されています。



### 独逸話 ②

#### ベルツ教授と草津温泉

1876年から1905年まで日本に滞在したエルヴィン・フォン・ベルツは、東京医学校(現在の東京大学医学部)にて教鞭を執り、皇族方の拝診にあたりました。日本の近代医学の発展に貢献し、「蒙古斑」を



ベルツ

命名したことで知られています。ベルツは草津温泉の成分を研究して温泉療法を提唱し、「草津には優れた温泉のほか、最上の空気と理想的な飲料水がある」と、その名前を国内外に広く紹介しました。また、彼は日本の伝統的武術にも関心を持ち、講道館柔道の創始者である嘉納治五郎らと交流を重ね、柔道の近代的発展に大きな影響を及ぼしました。